

タイ訪問を終えて

窪田美恵子

氷点下! 寒い日本を出発して摂氏30度のタイへ。しばらくは寒暖の差に身体がついていかず、しかし気候だけではなく、人々もみなあたたかく迎えてくれ、とても嬉しかったです。

翌日、アクセス21がチェンマイ郊外のサンバトンの村で支援しているHIVと戦っている女性たちが作業している施設を見学しました。綿100%草木染め、女性たちは一針一針、丁寧に作っていました。

午後はチェンマイ市にてセレモニーがあり、その後2校の学校訪問をしました。子供達はみな生き生きとしており、笑顔がとても印象的でした。また一週間のうちで金曜日だけ制服が違うのだそうです。タイの民族衣装を着ていました。タイの文化を守るため、日本にはない習慣に驚きと、素敵な習慣だと感じました。

土・日は学校は休みのため、山の上の寺院、ドイ・ステープ寺院、山岳民族の村を見学、ゴールデン・トライアングル、舟でわたり国境を越えラオ



ドイステープ寺院の前で向かって左が市川、右が窪田

スへ。翌日はまた国境を越えミャンマーへ。ラオスもミャンマーも日本との違いに少しカルチャーショックのようなものもありましたが、子供達がみな笑顔で接してくれるのが嬉しかったです。

その夜、バヤオ・ドークカムターイの学校で先生、子供達とキャンプファイヤー。子供達はタイの踊りを披露したり、歌を歌ったり。私達は日本のうたをもちろん日本語でうたい、最後はみんなで輪になり、タイのダンス?を踊り、子供達と楽しい時間が過ごせました。「言葉は通じなくてもなんとかなる!」でした。

そしてバヤオでのセレモニー、学校訪問。タイでは幼稚園から算数を教えており、少しびっくりしました。子供達の中には「こんにちは」と日本語であいさつしてくれる子もいて驚きました。最後にサンサーイの学校を訪問して日本へ。

このタイへの旅を終え感じた事は、最初は言葉も通じず、どう接して良いかとまどっていましたが、たとえ言葉がわからなくても、たとえば折り紙をしたり、ふうせんで遊んだり、体を動かし、子供達といっしょに遊ぶには言葉はいらないんだなあ。そして、子供達はみな生き生きと勉強していて、素晴らしいと思いました。

この旅で自分自身、とてもすてきな経験ができたと思います。

タイ奨学金里親プロジェクト第3回里親ツアーに参加して

寺澤順子

2005年1月、タイ北部チェンマイ、バヤオの小学校6校で、タイの子供達142名と先生、保護者に会ってきました。支援を始めて3年という月日が過ぎ、自分がプロジェクトの代表を努めているにも関わらず、我が子が小さいため、一度も現地に行った事はありませんでした。プロジェクトの運営をする内に「本当に必要な支援なのだろうか」と、いつも自問する日々が続いていました。

今回初めて、現地チェンマイの小学校を訪問した時、思わず英語で高学年の子供達に話しかけてみました。すると「英語が大好きです」「学校は楽しいです」「将来は先生になりたいです」と大きな黒い瞳をキラキラと輝かせながら答えてくれました。ある学校の英語教師は「自分は教員でも家族を食べさせるのがやっと。だから娘にはいい教育を受けさせ、チェンマイ大学を出て航空会社に就職が決まりました」と話してくれました。子供はひたむきに生きる親や教員の姿を見て育ったのでしょう。チェンマイ市には、貧しい家の子供でも、優秀なら優先的に入れる公立の女子中・高校があり、卒業すると大学等への道も開けます。LL教室もあり、教科書もカラフルで使いやすいそうでした。特にチェンマイを始め都会の学校教育の環境は、想像以上に整いつつある事がわかりました。しかし図書館らしき所は見当たりませんでしたし、保健室、音楽室、体育館もありません。チェンマイでは寺院に隣接、または敷地内の小学校がほとんどで、狭い敷地にアパートのような2階建ての建物があり、校庭は狭かったのが印象的です。子供達は親たちが毎日バイクで送り迎えしているようでした。